

小林秀雄著『本居宣長』:各章主題の「関係論」的纏め

十一章	①理論的な思想(物:場 C')②學問(物:場 C')③己を知る道(物:場 C')⇒からの関係:どんな①でも「④:不思議な劇を演ずる。②とは③である」(D1の至大化)⇒「⑤:卑近・俗なるものに道」(④的概念F)⇒E:⑤とは「⑥にとつては「非安心・不納得」(即ち「己を知る」)。故に「俗なるもの」とは、現實とは何かと言ふ事で『好信樂・風雅』となる」(Eの至小化)(③への距離不獲得:Eの至小化)⇒⑥宣長(△粹):②③への適應正常。
十二章	①文學の本質(物:場 C')②歌の大道(物:場 C')⇒からの関係:①につき「③:出来る限り明瞭な觀念を規定(D1の至大化)してみる事。②を徹底的に分析(D1の至大化)したなら、その先に新しい展望は開けるに違ひない」(D1の至大化)⇒で「④:『物のあはれ』論」(③的概念F)⇒E:④といふ「『あしわけ小舟』の楫を取つた」(Eの至大化)(④への距離獲得:Eの至大化)⇒宣長(△粹):①②への適應正常。 (即ち、「Eの至大化」=「D1の至大化」)
十三章	①宣長の開眼(物:場 C')②『源氏』(物:場 C')⇒からの関係:①とは「③:②が人の心を『くもりなき鏡にうつして、むかひたらむ』が如くに見えた(D1の至大化)、といふその事」(D1の至大化)⇒「④:人間觀」(③的概念F)⇒E:終生變はらぬ④が「その感動のうちに定着した」(Eの至大化)(④への距離獲得:Eの至大化)⇒宣長(△粹):②への適應正常。

